

山・スキー・自然

石川俊夫

協会監査役の千歳空港会社・秦 敏夫社長は、いまでも休日毎に「歩くスキー」に親しまれ、昨年「北海道新聞」にその意義を書かれたが、年々「歩くスキー」に対する一般の関心が高まり、今年には札幌市教育委員会主催の「青少年少スキーツアーのつどい」も開催された。オスロにいる友人の便りでは、冬は日曜毎に一家揃って一日十数キロ歩くスキーを楽しむのが、ノルウェー一般の風習とのことである。

戦前はもちろん、戦後十年ばかりは、北海道にスキー一党が多く、札幌市周辺では砥石山、百松沢山、札幌岳、無意根山、空沼岳、手稲山、奥手稲、春香山、朝里岳、余市岳などの山がそれぞれ特徴のあるコースによって、一日、あるいは一夜泊りのスキーを十分楽しめる遊び場であった。土曜日からスキー行には山小屋を利用して、ランプの下で冬山の夜を語り合う楽しみがあった。

当時はリフトの設けられたスキー場はなく、スキーといえば山スキーのことであり、老若男女が技量に応じて山を目ざしたものである。麓からスキーにシールを貼り

つけて斜面を登り、山頂に達する頃は相当身体の鍛錬にもなっていた。頂上でシールを外したあとは、白銀の冬山、輝く樹氷の美しさを満喫しながらのスキーを楽しむことができた。ひとたび山スキーの味を覚えたものは、次の日曜が待ち遠しいほど冬山の魅力はすばらしいものであった。

いつの間にか、リフトのあるスキー場ができ、リフトがなければスキーをしない人達が多くなつて山スキーは忘れられ、ついにスキーも靴もリフト専用のものでのみが販売されるようになった。

しかし、雪の多い北海道で長い冬を楽しむにはスキーの多様性を考える必要がある。「歩くスキー」をすすめるとともに、「山スキー」の普及発達も計らなければならない。それによって都市周縁の緑の山の自然を破壊せずに、そのまま山スキーの聖地として利用することもできるのである。地理的気候的に本州とは異なる北海道冬の発展には、スキーのうえでも視点を変えた独自の新しい方針がたてられるべきである。

(会誌)

